

GIGA(Global and Innovation Gateway for ALL)実現への始動

2020年度(令和2年度)に小学校で新学習指導要領が全面実施され、小学校外国語教育(英語)の5・6年生での教科化、主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の推進、GIGAスクール構想の実現、さらには教科担任制が予定され、小学校英語教育は連続的に暇なく出される課題を抱えながら、ひたむきに走っているという感がある。本実践は、このような渦中での研究実践として、非常に意欲的で意義深いものであった。

◆成果について◆

総括的に表現すると、今年度の藤田峻先生の研究実践の成果は、上記の課題に正面から真摯に取り組んだ点にあるといえる。Globalという観点では、オーストラリアの小学生との交流を計画し、石を積み上げるように一つ一つステップを踏み交流を実現させていった。異文化間交流プロジェクトは一見華やかに見えるが、相手側との調整は容易でなく、忍耐力と地道なやり取りがなくては成立し得ない。Innovationという観点では、協働学習の幅を広げた点に成果がある。1人1台となったばかりのタブレット端末を活用し、録画機能をグループ発表の改善ツールとして、Microsoft Teamsを省察のリアルタイム共有ツールとして用いた。藤田峻先生の綿密な準備と児童の適応性の高さ故であるかもしれないが、ICT環境の有効性と発展性を印象づける実践であった。

英語能力が限られている小学生の異文化間交流は、これまで児童および教師にとってハードルの高い挑戦として敬遠されるか、カリキュラムに取込みにくいためイベントとして扱われることが少なくなかった。しかし、本実践は4年生の外国語活動の段階でありながら、言語習得の要素と異文化交流の要素の両方を含み、外国語活動・外国語科の言語活動としての実行可能性を明らかにした。また、児童の興味関心や発達段階に配慮しながら、「モジュール型短時間学習を組み合わせた異文化間交流の単元」を構成した授業デザイン力も注目に値する。

◆課題について◆

異文化間交流における今後の課題は、「双方向性」にあると観察される。日本側から自己紹介をビデオ映像にして送ったところ、オーストラリア側からはそのビデオを見ての感想と自己紹介をカードの形式で返信してくれたのだが、その内容は日本人児童の英語をほめるものが多く、自己紹介の内容に直接的に応答するものがなかった。双方向性を豊かにすることを工夫すれば、「やり取り」の面白さや発見の機会を与えることができるであろう。5・6年生や中学校英語への接続を意識し、3・4年生の外国語活動の段階から双方向性に配慮することは必要な長期的視野である。

6月11日に実施されたリアルタイムでのオーストラリアとのやり取りについても、改善が可能である。下記は絵本紹介の一部抜粋である。

生徒(=S)1: This book is “なつみはなんにでもなれる。”

S2: Natsumi and Natsumi's mother.

S3: Do you like alien? I like green alien.

S4: What's this? This is Fuji-san.

What's this? This is 歯医者さんに行きたくない気持ち.

S5: What's this? My second turtle.

S3: Read this book.

該当するページを映しながら、グループの児童5人で伝えていた。うまくいったものの、児童の表情に少し心もとなさがあったため、より安心して交流するための別案を提案する。教師やALTのストーリーテリングに挿み込む形で児童に言わせる方法もある。教師の介入(いわゆる足場架け scaffolding)をすることによって、児童に安心感が生まれ、内容の伝わり方も確実になり、児童が教師のインプットを模倣する機会にもなる。交流の中で教師がどのような介入をすれば言語習得は促進されるのか、研究により明らかにしていきたい部分である。

GIGAスクール構想が小学校英語で発展すると確信させてくれた本実践であった。今後は、教科横断型のSTEAM教育も見据えた更なる充実を期待する。